
影しかない

せり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影しかない

【Nコード】
N6622M

【作者名】
せり

【あらすじ】
あえて無し……………

く僕と周辺く1（前書き）

ポケダンの要素は薄いです。ご了承ください。

く僕と周辺く1

町を歩く・・・ゴミのように蹴り飛ばされる。

立ち上がり、歩く・・・泥をかけられる。

気にせず前に進む・・・誰もが僕を遠ざける。

店の前に立つ・・・店が閉まる、まだ昼なのに。

こんなの慣れっこだった。何せもう1年もこうだ。

悪タイプ差別・・・かつてこの世界を覆いポケモン達を苦しめた闇の勢力は全てが悪タイプのポケモンで構成されていた。首領が倒され、事件が解決し平和な世界になったが、事の犯人達である悪タイプのポケモン達は忌み嫌われ、悪意のない者達ですら必要以上の

仕打ちをうけた。

そして僕も・・・《ブラッキー》という悪タイプである種族だ。食べ物には入らない、住む場所もない、友達なんてそこら辺を見渡したっているわけではない、親はもういない、兄弟がいたけど、自分のせいで兄や姉、弟に妹までこんな目にあってほしくないと思いい別々に暮らしている

「セーにいちちゃん！」

後ろから声が聞こえる、聞き慣れた声だが聞こえないふりをしてさっさとこの場から立ち去ろうとする。

「にいちちゃん！」

町をはずれポケモン達の姿が見えなくなると同時にそいつも僕に追いついてきた。

そいつは僕の弟だ、末っ子で親が名前をつける前に死んでしまっただから名前がない。イーブイなのだが所属の中でも特別小さいから『チイ』と呼んでいる。

「あのね、チイ・・・」

懲りないやつに僕は言ってやる

「チイも知っているだろう、僕は悪タイプだから周りからは差別される。そんな僕の近くにいて、普通に話しかけてたらみんなはお前のことをどう思う？」

なるべく優しめの声でそう言ってやった、チイは形は小さいが結構我が強い、命令などしても聞かないだろう。とか思っていると返事が返ってきた。

「そんなの知らないよ。」

僕は今までに何度も忠告した、そのたびにコイツはこう言ってきたのだ。僕としては凄くうれしい、涙が出そうだ、いやもう抱きついてやりたいくらいだ・・・しかしこんな事が続いたらいずれはチイも周りから避けられるだろう。

今僕を見ているその目は真剣だった。こっちも真剣だ・・・うむ、にらめっこだが・・・僕とにらめっこをしたやつはだいたい種族上笑うではなくどうしても怖がってしまうんだがコイツだけはどうも目で征することができない。困ったものだ・・・

「今日はお知らせがあるよ。」

いきなり切り出してきた。

「明後日がリーアねえちゃんの誕生日だよ。カチヨウに伝えておいてくれって言われたんだ。」

知っている・・・僕がリーアの誕生日を忘れるはずがない。誕生日どころか好物から趣味までリーアのことなら全て知ってる！

リーアというのは僕の妹・・・世界で一番大切な妹。それがもうかわいくてかわいくて、最近『リーフィア』になってさらにかわいくてもう、え！？天使ですか？「みたいな。あの少し虚ろな目、少し皮肉っぽい口調・・・抱きついた時のフカフカ感が・・・

「気持ち悪いよ・・・それ完全に変態行為だよ。」

驚いた！「まさかチィ・・・読心術を！？」

未恐ろしくなり問うてみると答えは簡単

「声に出てたし・・・」

ん？・・・ウソ！・・・ああやってしまった。弟の追い打ちは酷いものだった。

「その様子だと声に出る前も色々と変なこと考えてたんだね、このシスコン野郎！今度リーアねえちゃんに言ってやる！」

これ！どこでそんな言葉を覚えた！というか、

「それだけはやめてくれ、リーアに嫌われたら僕は生きていけない、地獄へダイブだ。」

僕の言葉を聞きチィはニヤニヤしながら次は何を言ってやるうかと考えてる、イヤミなやつだ。

「あれゝ悪タイプのポケモンだゝ」

さてさて明るい口調だがあからさまにからかう気満々しかも悪性の声が届いてきた。いきなり来るものだから反応できなかったぞ・・・そして姿を現すそいつ・・・ら

「そこのおチビちゃん、何を楽しそうに話してるんだい？」

「うわゝ気持ちわる・・・」

3匹・・・ふむ、一般的にはここに出てくるであろうそいつらはたいていいじめっ子キャラだ、小さめのガキンちょであるとさらにそれらしいが・・・そいつらはまるっきり一般のいじめっ子キャラ

ではなかった。いや既に『子』ではないし事が『いじめ』で済むとも思えない。

種族は『カイリユー』に『ボーマンダ』、『ガブリアス』と盛大なドラゴン祭り。

「何でこんな所にいるんだよマジ迷惑だし・・・」

「どっか消えてくんない？」

「っーか気持ちわる・・・」

そいつらは口々に言いだした。僕は気にしないが・・・さあ言われたとおり退散だ、チィとの関係はこれ以降目撃されなければ大丈夫だろうから放っておこう・・・と

「セーにいちゃんに謝れ！」

やりやがった・・・僕の背後で起こってる事がみるうちに脳内に広がってゆく・・・

「にいちゃん？その悪がおチビちゃんの兄だって？」

想像と一致・・・何奴が言ったかは伏せておくとしてドスの利いた声だった。

「おい・・・おい冗談はよしてくれ。」

想像と不一致・・・意味が分からないが僕が2〜3日水を一滴も飲まなかったらああいう声になるだろう。

「お前も悪の血が流れてるってことか・・・気持ち悪」

3人目・・・ドンマイ、ゲームオーバーだ。その拒否った感もものすごく出てる声、面白いね。

「君達・・・僕を散々に言ってくれるのは構わない。」

振り返りざま中央にいるカイリユーに目を向ける、若干驚いたのだろうそいつらはにやけ面をゆがませた。元々ゆがんでるのに器用なものだ。チイも驚きの表情、

「ただし、僕に関わる事で身内が変な扱いを受けるようなら許さない・・・」

さあこの後の奴らの反応も予測してみよう。

「悪タイプの分際で何言ってるんだ？」

一致・・・驚いてはいたようだが恐れたわけではないようだ。

この後にも続くかと思っただがそれはないようだ。ではこちらのターン

「ただ君達のことを記憶しておくなんてめんどくさいから、今罰してこのことは綺麗に流しておいてあげよう」

「お前みたいなやつが俺たちドラゴンに敵うわけねーだろ、ハハ！逆にぶっ潰してやるよ」

一致・・・言うが速いかそいつらは僕めがけて技を放とうとした・・・そいつらは倒れてる。

「セーにいちゃん・・・なんか光った？」

光らせた。僕が『光玉』を使ったんだ。光玉は3秒ほど辺りに強い光を放つ。

「光がまぶしかったからそいつら気絶したんだろ」

そう言っでやるとチイは「へ〜」と納得したようだ。地面にのびているそいつらは・・・うん、かなり苦しそうにもだえている。僕の言った「まぶしかったから気絶」がウソだったらあり得る光景だ。無数にあるそいつらの切り傷やらアザに気が付いたチイが寄ってくる。

「やっぱりにちゃん何かしたでしょ」

「いや・・・そいつらはすっごくまぶしかったんだ」
適当に言いくるめてやるとチイは頬を膨らませ僕に軽く前足をぶつけた。

実のところ、光の中ではあいつらを殴らせてもらった。切り傷は僕オリジナルの『鎌^{かまいたち}融』でつけたもの・・・自分が戦う姿など誰にも見られたくないからね、光玉のフラッシュが持続する時間だけで終わらせたいし。

「それよりもチイ」

呼びかけるとチイが期待の目を寄せる、一体何に期待をしているのだろう？

「分かったろ、僕と関わってたらさっきみたいな事になるんだ」

そう言っでやると、すねたように、
「だからなに？」

とぶっきらばつに言い返してきた。

・

僕はまだ、悪タイプ差別の真相など知らなかった・・・

く僕と周辺く1（後書き）

情景描写がかなり下手ですが、以後お見知りおきを・・・

く僕と周辺く2

木々に囲まれ誰にも見つからずにここまで来た今日この頃、『ここ』とは僕の実家に行き着くには通らなければならぬ茂みの中だ。伏せたまま辺りを確認・・・誰もいない、うむ、よし。見つければ追放されるだろうからね。

結局、昨日はあの後何もなくてイと別れたし、町で目的のものを手に入れることもできなく野宿となった。町で購入予定だったものは・・・ずばり、プレゼント！

リーアの誕生日だから何かを渡してやろうと思ったわけだけど・・・追い返された。僕としてはこれ以上悪タイプが悪者のように思われるのは嫌だからね、強盗なんてしない。

それよりもリーアの誕生日、明日だが・・・どうしたものか。きっと他の奴らなんか構えてるよな。僕だけ何もないようだったら「リーアに嫌われてしまう・・・いや」リーア、かわいいよりリーア。こんな事考えている僕ってかなり危ないな、そろそろ外科手術が必要だろう。どのみちリーアはかわいい・・・あの静けさがなんというか・・・

「変態、何考えてんだよ。手術なんてもう手遅れだ。」

「うあ!？」

あまりの唐突さに変な声が出た、音の方向を見るとなんと真正面、なんで気が付かなかったんだろう。

「お前声に出してそんなこと言ってて恥ずかしくないか？」

けいべつの眼差しで僕に言葉を投げかける。どうやらまた想像がそのまま言葉になってたようだ・・・気をつけないと。

そろそろ紹介してやろう、さっきからこちらに話しかけてる奴は、

「よう・・・バーベキュー」

「なんだそりゃ？」

ずっこけた。簡単に説明してやると、僕の唯一無二の悪タイプ以外の友達であり『マグマラシ』なのだがバトルとかの実力的には進化系『バクフーン』をも凌駕するだろう欠点としては趣味の悪さ。『バーベキュー』とは今考えたあだ名である。

「いやね、バーベキューというのは僕のお気に入り小説、『人類』っていうSFもので登場する『人間』ってエイリアン的なものが好んで食べる・・・料理名だったかな？いや食材だっただろうか？まあそんなものだ」

ちなみにこの小説にはゴリキーみたいなかんじの変なのが描いてある挿絵とかが入ってて作者はノンフィクションだ！と言い張っているが、小さな鉄球を音速を超える速さで撃ち出す装置とか非現実的なものが出てくるし、どう考えてもSFだ。

「で、なぜ急にあだ名なんかつけんだよ」

『バーベキュー』とはなかなか不可解だったんだろう・・・そう睨むなっば

「昨日辺りからかな？なにか僕の心の中が覗かれてる感覚があるんだ、僕自身心の中では何も知らない者に何か説明してる口調だし」

「あ？・・・まあいいや、それはいい、たいした問題じゃないだろうからな。だがお前なんかお困りのようで？」

別に困った顔をしていたつもりはないがそう真剣に聞かれるとな、
なにか適当に言ってるやろ。

「光玉が尽きた、仕入れてきてくれ」

「・・・オレよお、思うんだがお前強いぜ、わざわざあんな目つぶ
し使わなくても喧嘩でお前が負けるかよ？」

ああ、自分で思うのはおかしいが確かに僕は強い、昨日のデカブ
ツだってまともにやっても結果は同じだっただろう、だけど

「僕は他人に自分の戦いを見せたくない、見られたくない、見られ
ると気味が悪い。だから光玉は必須だよ」

「んゝ・・・確かに、お前の戦いとか見た日には、トラウマになる
な」

バーベキューは四足歩行のくせに二本足で立ち、前足を僕に向け
てにやける。

「お前つてめっちゃくちゃ殴るよな、とにかく殴るよな」

そう、バーベキューは僕の戦闘を見たことのある唯一精神がイカ
れなかったやつだ。コイツ以外には刺激が強すぎるだろう、あまり
見るものじゃない・・・ってこの野郎まだ口を開いて・・・

「あと、すんげーのが鎌鼬ね、お前のあれ、あれがよう、おつどろ
きのなんのつて、触れたと思ったらスパッと斬れちゃってさ怖いよ
な、ていうか殴りすぎなんだよマジで・・・」

そんなに言うかな、僕は意識を残さない程度にすませてるつもり
なんだけど、

「ほんじゃまあ行ってくる、金はもちろんあるよな、それなりにも
らうから、じゃな。」

「ばいばいバーベキュー。」

バーベキューの奴はさつさとどっかへ行ってしまった。金って・
・金金金あつたかな？それはいいが、このほふく姿勢のまま家まで
行き着くには・・ああ、今日も野宿か・・いやまて、おかしい、
実におかしい。

この森は名前なんて無いがかなりのポケモン達が住処としている、
それなのにこの静けさは・・でも誰もいないのは都合が良い、こ
のまま歩いていけば日没までになんとかつくだろう。

しばらく歩いた

「う・・うつう・・。」

何か居た、忍び寄ってみる。

「うつ・・。」

泣いている、こちらに気がついていないようだが地面に膝をつい
て両手を目に・・泣いているのだろう。サーナイトというポケモ
ンだったかな？ふむ、声からして女性だな。

普段の僕ならば放っておいただろう、でも今泣いている彼女は好

みのタイプだ。大人びていて身長が高めだからね、そうなれば、困っているようだし助けてあげよう。

「どうしたんですか？」

声をかけると返ってくるのは当然返事だ。

「森のみんなが・・・連れ去られて・・・」

彼女は顔をあげない。

「貴方は？どなたですか？」

相手の顔を見もせずに名前を尋ねるなんて、もし尋ねた先が知り合いだったらその知り合いは泣くだろうね。

「名前は・・・名乗らないでよく、あんまり歓迎される奴じゃないので。なんとも呼べばいいです。」

「お願いします！」

彼女は僕に頭を下げる、もともと下がってるが下げる。一度も僕を見ない。

「みんなを、森のみんなを助けてください。」

・・・めんどくさそうだ、というよりこのサーナイトさんなんてこんななんだ、相手を見ずに会話して状況もろくに説明せず、見ず知らずの名前を名乗らない絶対不審者に頼み事って、しかも森にいたポケモン達が連れ去られる・・・森が静かな訳は解ったがなんで

連れ去られるんだよ。かなりの数だと思っただけど・・・

どうしよう、綺麗なお姉さんを助けてあげるかそれとも見て接触してなお見ぬふりするか・・・

なんだか視線を感じるな、サーナイトさんのものじゃないけど・

・僕の思考が見られてる気がする、さっきからいや昨日から、なんだろう、僕はこのサーナイトさんを助けて事件に巻き込まれないといけない気がする。バーベキューはたいした問題じゃないとかいつてたけど結構痛い視線・・・僕って事件に巻き込まれることを期待されてる？

そういうことなら・・・仕方がない、お姉さん綺麗だし。

「僕が、事件を解決します」

高々と宣言。

「本当ですか！・・・よろしく願いします。」

僕っていい奴かもしれない。

さてさて事情を聞いてポケモン達を連れ去った数十匹のポケモン達がどこへ行ったかを聞いた僕はありがちな洞窟の入り口まで来たわけだが・・・とうとうサーナイトさん僕を一回も見なかったな、まあ見ればこんなこと頼む以前に逃げ出したかもしれないけど。

なるべく穏便に済ませたいがため、かといって森のポケモン達ほとんどを連れ去るほど不可思議でむちゃくちゃな連中だ、話し合いなど通じるわけがない。強行突破は・・・だから穏便にすませたいってば・・・潜入開始っと

「よう、詐欺師」

「間が悪いやつめ・・・」

詐欺師とは前述したSF小説『人類』に出てくるある登場人物の内の一人の職業・・・だったかな？いや、たしかそいつの名前、じやなくて好きな食べ物だった様な気が・・・まあとにかくその人物と僕の正確が似ているからと言ってとある友達が僕のことを詐欺師と呼び始めたのがきっかけで僕の背後に現れた奴もそう呼ぶ。

「あ？・・・まあいいや、それはいい、それよりも光玉仕入れてきたぜ」

突然再登場したバーベキューは、「ほらよ」と光玉を三つ投げ渡す。

「えらく速かったな」

「ああ、町まで行くのはめんどくせえ」

そいつはとても黒く笑った。

「盗ってきた」

「そうかい」

別に何でもよかったが、こいつは悪いと自覚していてやっているのだから質が悪い。どこから盗ったかは知らないけど、これでもしもの時の逃走手段ができた。

「金は今度でいい、このメモに書いてある額用意しときな」

バーベキューが差し出したメモを手取る・・・冗談じゃねえ！
桁間違ってるぞ三桁ぐらい。

「おいバーベキュー、これはここの辺に小数点を打てばいいのか？」

「ああ、一番右端になら付けても構わない」

「それじゃ意味がないんだよ」

「それよりなにやってんだ？」

「岩の鑑賞だ」

「嘘付け、女つたらし、こまってる好みのお姉さん見つけたからってよりによってお前がこんなことするとはな」

ばれてるし、

「まあそういうことだ、手伝ってくれ、一匹じゃなにもできそうにない」

「さっき渡したメモにおかしくならないように0だけを付け足して
いてくれ、そうすりゃやってやる」

奴の要求はつまりこうだ、一桁増やせと、もとより半端無い値だったから一桁増えただけでも大違い、借金だな。

まあこれで、なんとかかなりそんな気はしてきた。理由が正当であ

るかどうかはたいした問題じゃない、動機はいつも不純さ。

く僕と周辺く3（前書き）

何を言っているのか解らない文字軍を投稿

く僕と周辺く3

バーベキューを連れていたのは間違いだった。

「ヒヤハハハ!!」

笑い声、それもイカれたものだ。声の主、バーベキューは戦闘狂だ、普段は比較的まともな人格なのだが、一度戦いが始まると豹変し、狂ってしまう奴・・・すっかり忘れていた。

「おらあ、燃えちまえ燃えちまえ!」

「バーベキュー止まれ・・・」
軽く言ってやる。

「ハデにいつてやんぜええ!」

「オイ!止まれ!!」
強く言ってやった。

「全力で来やがれ!でねえと焼けるぞお!」

「やめなさい!」
軽く叩いてやった。

「もつとかかってこいや!」

「ヤメロ!!」

蹴り飛ばしてやった。バーベキューは吹っ飛んで洞窟の壁に埋まり込む、そこで石像になっいてくれ。

今の状況をお伝えしよう。僕たちは意気込んで敵のアジトとして

はありがちな洞窟に忍び込んでいるはずだったが・・・このどうしようもないやつが怪しげなポケモンを見つけたとたんにドハデに炎をぶちかましゃがった。すると奥からわんさか湧いてくるのは当然非友好的な奴らで、招かれざる客と判断し攻撃をしかけてきた。僕は逃げようと思ったんだけど今そこにある壁の彫刻と化している奴は大喜び、「久しぶりに暴れてやるぜ!」とか言ってから湧いてくるポケモン達に突撃していったと・・・何が「久しぶり」だ、あいつ常に暴れっぱなしなのに。

「逃がすな、追え!」

わらわらと湧いてくる数十もの好戦的なポケモン達が僕の方へ突進。僕の選択肢は当然・・・

逃げる!!

元来た道へダッシュ! あんな大勢相手にしてたら絶対疲れる。疲れるのは嫌いだ、疲れたらしんどい、しんどいことしたら疲れる疲れたら動けなくなる、でも逃げるのも疲れる、疲れたらしんどい。しんどいしんどいしんどいしんどいしんどい。

「あゝもうやってられない・・・」

ポケモン達の足音やら声やら様々な騒音がうるさい・・・うるさいのは嫌いだ。

僕はバーベキューにもらったばかりの光玉を取り出す、コイツの用途といえば結構限られていく。その少ない用途が現状の打開にぴったり。

透き通った白の球体を取り扱い説明書に乗っ取って使う(そんなものはないけどね) 光玉を使ったときの耳にあまり優しくない音と

目に凄く悪影響がある光が洞窟全体に広がる、音と光に耐えられなかったポケモン達が倒れていく。僕は目も耳も塞いでいるからその影響は受けないけどね。

「目が・・・目があああ！」

「ああ・・・目が、目が・・・」

意識は保っていた連中もただでは済まなかったのかな？なんか聞いたことのあるテンポだな・・・まあいいや。その隙に逃げる、出口へ向けて一直線、もっともこの洞窟は結構入り組んでいるから一直線とはいかないけど。バーベキューは・・・うん、放っておこう。多分大丈夫だろう。

しかし、一体全体あのポケモン達は何をやっていたんだろう？僕の見た限りでは全員森にいたポケモン達だけど・・・何故追われる？救出しようとしたのに・・・ん？待てよ・・・いや、別に待たなくても良い、なぜか考え事をするときは「待てよ」と言う。なぜだろう？便利だから、待てと言えば相手は待ってくれる、自分のために相手が時間を無駄に消費してくれる・・・ありがたい。じやなくて、さらわれたポケモン達が相手なら助けに来たことを伝えたら追われないどころか依頼達成だ、そうに違いない。なんでこんなことにもっと早く気がつかなかったのだろう？

というわけで、もうすぐ出口というところで戻る・・・さつき光玉を使ったあたりまで戻ってきた。

どうせ話しかけるなら美しい方にしよう。ちょうど『キレイハナ』さんが近くに倒れている・・・失礼、ちょっと起きてください。

「ん？・・・」

期待通りのかわいらしい声が聞こえた。

「いきなりで悪いですが、僕はサーナイトさんに頼まれて連れ去られたあなた達を助けに来ました。」

「・・・ええ？」

普通の疑問ではない・・・僕の期待したクエスチョンは「助けに来てくれたの？」という意味合いがこもった返答だったのだが、うわずったその疑問は明らかにおかしい奴相手に非難を示すものだった。

「連れ去られるとかそんなのないんですけど・・・」

まさかの連れ去られてない宣言。

「私達はここでサーナイト姫のお誕生日祝いの準備をしていただけなんですけど・・・」

・・・オイ、ちょっと待てい。あのサーナイトさん姫ですか・・・ちよつと姫さん、なんなんですか？勘違いですか？質悪いですよ。なんでそれなりに意気込んでこんな洞窟へ来なきやいかなかったんですか？バーベキューの事もあるしこれじゃただの通り魔じゃないですか。

そして僕に追い打ちが降りかかる。

「って、貴方よく見たら悪タイプじゃない！・・・近寄らないで、あっち行ってよ！」

そして、キレイハナさんはどつかへ行つた・・・さすがに傷ついた。僕はよく見なくても全身黒だし、全身黒で悪タイプじゃないなんてそうそう居ないだろうし僕はもうなんか凄い思いこみしてたし・・・やだなあ、なんだか自殺したくなつてきたじゃないか・・・尖つた岩はないかな？あつたら頭突きして碎いてやるのに・・・さあ碎けるのはどっちだろう？僕かな？それとも岩だろうか？やる気しねえ・・・おお、ちょうどよさそうな岩がある。どつかで見たような形だな・・・この岩で死ぬとは、運命を感じる。じゃあね、僕の思考をのぞき見している者達よ・・・

僕はその岩に頭から突撃

「いつてえええええ！」

僕は死んでない、僕は痛くない、僕は別に叫んでない。死ぬときに叫ぶのはダサイからだ。岩から声、岩は普通喋らない、叫ばない、苦しみもだえたりしない。岩は、岩は、岩は……

「なんだ、バーベキューか・・・」

完全に岩と一体化していたそのつは砂埃を払いながら立ち上がる。

「なんだとは何だ・・・腰痛え」

バーベキュー、僕が付けたあだ名だ、なんか呼びにくいな……

「おいバーベキュー」

「なんだ？」

「なんだとは何だ」

「意味が違う！用件はなんだ？」

「お前な、呼びづらい、これから『セキゾウ』って名乗れ」

石像のセキゾウ・・・いいじゃないか、一文字減っただけでも大違いだ。元バーベキュー、もといセキゾウが僕を半開きの目で睨んだ・・・ちよつと怖い

「お前な・・・もうどうでもいいや」

ふつ、あきらめたか。コイツをからかうのは面白い。

「代わりに、お前にはその無表情をやめてもらおう」

「言わなければ傍観者達には解らなかったのに・・・」

「は？」

「何でもない」

そう、僕は無表情だ、いつでも、どんな時でも、そりやさつきセキゾウに突撃する際だって無表情さ。セキゾウは僕常に無表情が怖いと日頃から言っていた、この際それをやめてもらいたいのだろう。

でも、

「僕は内面をできるだけ自分以外の奴には見せたくないんでね、これだけは譲れない」

そうですかい、とどうでもよさ気な態度のセキゾウ、

「さて、そろそろ帰るわ」

「もう・・・帰るのか？」

試しに寂しそうな表情をつくって言うてみた。

「気持ち悪いからやめろ！」

本当に気持ち悪そうだ。

「だろう、だから言ったんだ」

普段無表情な奴がいきなり感情を表したりするようになったらかなりイメージが崩壊するんだろうな、僕はセキゾウから気持ち悪いと評された表情を消して無表情に戻る。

「今度こそじゃな。また会えると・・・いいんだけどな？」

「お前とは二度と会いたくないな、ややこしくて仕方がない」

「じゃあもう会わねえよ。」

セキゾウは僕に背を向けて右手を2、3回だらしなく振ると二足歩行のまま出口へと向かった。僕も道は一緒なんだけどしばらく間を開けて行こう、この後即また会ったらなんか締まらないから。

というか、なんなんだよ今日は。酷すぎる、僕がせっかく綺麗なサーナイトさんのために森の住人を助けようとしたのに・・・そのポケモン達は実はとらえられている訳じゃなく、サーナイトさんに秘密で誕生祝いの準備中。サーナイトさんが連れ去られたと勘違いしたのは多分作業をサボっているポケモンを他のポケモンが連れ戻しているところを見たんだろうな・・・僕って救いようがない？あ、あの時本当に死んでおくんだった

「死んでも誰も悲しまないだろうな・・・」

別にどうでも良いことを呟いてみた。家族思いの力チヨウはどうだろう・・・末っ子でやたらと僕になついてるチイはどうだろう・・・リーアは？リーアは僕が死んだら悲しんでくれるかな・・・どうだろう？

「戯^{あそ}れがましいだけだけど・・・」

そろそろいいだろう、セキゾウもどこか遠くへ行っただろう。

僕は結局すごい邪魔をしてそのまま謝罪無しでそこから立ち去る事となった。

帰り道、ちよつと見かけたサーナイトさんは、さも幸せそうに洞窟へ駆けて行っていた・・・誤解が解けたんだろう、苛立たしい。結局全て無駄無駄無駄、こんなことならリーアにきのみでも持って行ってやるんだった。

仕方がない、今からでも家に帰ろう・・・僕は走る、体にあたる空気が心地よかったら救いようがあったのに、空気はぬるい、でも今日中に家に着いておかないとリーアの誕生日に間に合わない。

全力で走ったら夕方には行けるかな？ああ、でも全力で走るとすぐく疲れる、やだなあ・・・それでもだとしてもあんなこんなで嫌なことがあれば走ればいいじゃん、男なら走れ、走り抜ける！

「そんなの知らねえよ」

く僕と周辺く3（後書き）

□
□ の用途がイマイチ解らないです。

く僕と周辺く4

一般には、睡眠中に時々夢を見るらしい。楽しい夢、悲しい夢、あり得ない事が起こる夢、そして怖い夢とか。

それはなかなか回避できないもので、夢の内容は自分で決めたりなんてできない。しかし僕は夢を見たことがない、楽しい夢も怖い夢も。

そのことをセキゾウ（元バーベキュー）に話してみたら、「そりゃ夢がなさそうだもんな」と笑い飛ばされた。結構前、僕がまだ小さかったころだったからそうなのかと本気で思っていたけど。本当にそうかもしれない可能性は否定できないけど・・・

今朝もまた、僕は夢を見られなかった否、見る気などなかったまあとにかく、夢をみない、夢がない、そういう僕は通常の世からすれば異端だった……

異端、これ以上なく外れたもの

「おはよう、カチヨウ」
「ああ、おはよう」

名前だけ出てきていた、いや名前と認識して頂いていただろうか。『カチヨウ』とは僕の兄でこの家族の長男だ。本名ではなく僕専用の呼び方、親が居ないから家長つてわけ、チイも真似しているんだけどね。カチヨウの種族は『ブースター』、あまりさわりたくない体温を持つ・・・かなり熱いからね。カチヨウはパーティーの準備中、色とりどりのきのみを板に乗せて器用に頭で運んでいた。パーティーとはリーアの誕生パーティーのこと、昨日僕は結局走り続けてなんとかここ、僕の実家に到着した。

「セル、まだ大量にあるんだ、運ぶのを手伝ってくれ」
「了解」

『セル』とは僕のことだ、愛称だけどね。別に特別な名前って訳じゃないんだけど知らなくったって良いじゃないか、名前ぐらい。

僕は山積みになっていくきのみ群から適当なものを選ぶ、リーアの好きなきのみはどれだったかな？・・・

僕の家族は僕を入れて10匹、他界したのを除けば7匹と多いからきのみは大量に必要となってくる。

「久しぶりじゃないかよ、セル」

きのみを選別している僕の背中に軽い衝撃が加わる。僕の背に前足を置くそいつは『サンダース』、僕の兄で僕からの敬意を込めた呼び方は『デンチ』……いやね、小説『人類』にあるんだよ、電池っていう電気をためておくのだったけ？電撃を発射するものだったかな……いや、投げつけたら爆発するやつだ、そうに違いない、その電池が由来。ちつとも敬意なんかこもってないけど

「デンチ、暇だったら手伝ってほしい」

「お前の仕事じゃないかよ、俺は忙しいんだよ」

絶対忙しくなんかないだろうに・・・デENCHIは逃げるように僕の視界から消えた。

黙々と作業を続ける僕はなかなか絵になっっている気がする。・・・一つ、二つ、三つ・・・あれ？選んではいいけど、どうやって運ぶんだ？・・・カチヨウは？カチヨウはどうやっていた？・・・分からない。僕は種族上、四足歩行だ。手に持つことはできない・・・どうすれば？

「セーにいちゃん」

弟のチイだった。

「もっきのみいらないよ・・・」

「・・・そうか」

チイはそれだけ伝えるとちゃっちゃと行ってしまふ・・・僕はいたい何をしていたのだろう。

さてさていくら家族でも僕に友好的な奴らだけではないということを理解してもらおう。

だるそうに歩いている薄紫を発見した。

「ああ、お前か・・・しばらく見なかったな、てつきり死んだものかと思ってた」

「僕は死にたいよ・・・」

僕の双子の姉、『エーフィ』の『名無し』である、名前を覚えてくれないため名無し、ついでに　なんだけど素っ気ない、僕に会うたびに嫌みなことをほざいてくるから僕は苦手だ。本当に死にたくなる・・・こんな奴は適当にあしらって、次いつてみよう・・・

「お姉様、おはようございます・・・」

「うむ、よし」

またまた僕の姉、『シャワーズ』の『お姉様』、何故僕がらしくもなくお姉様なんて言っているかというと、「年上を敬え・・・」とか言われたからね、仕方なくこうなってる・・・また変に厳しいお方なんだから・・・え？・・・名前はって・・・個人情報だ、それは本人の了承なしじゃあ明かせないな。

「なにか困ったことは無いか？」

「いえ・・・ああ、チイには外出時に僕に会わないように言っておいてください」

「何故自分で言わない？」

しっかりしていてそれで実は家では一日中寝ていたり・・・動かない方だが同時に5日に一度ちよつと食べるぐらいで最小限の食べものだけで過ごしているからかなりやせている・・・やせた運動不足ってけっこう珍しい気もするな。

「僕が言っても聞いてくれませんよ」

チィは近頃反抗期と見た。

あと挨拶してないのは・・・リーアだけだ。

リーアは庭にいた、しゃがんで植えてある花を斬殺しているところだった・・・って怖っ！

「あつ、お兄ちゃん、おはようございます」

カワイイ・・・礼儀的挨拶であり笑顔だとかではないんだけどそれがリーアらしい・・・ってやっぱり怖い、リーアは再び作業に戻った。

「リーア、何してるんだい？」

「生命を奪ってます」

「な・・・何故？」
なにゆえ

「暇つぶしです。私のために皆さんがパーティを開いてくれるということで、名無し姉さんより待っていると言われました」

この娘には同類を痛めているということが分かっていないんだろ
うか？リーアは『リーフィア』という種族でありくさタイプのはず
なんだけど・・・まあかわいらしいしいいや、なんだかこの「横顔
が見ていて癒されるというか、久しぶりに見たリーアはなんだかさ
らに可愛くなつたな」今すぐ抱きつきたい！！・・・」

「貴方殺しますよ・・・」

「え！？」

いきなり尖った声が飛んできた。

「先程から何を言っているのですか？気味が悪いです」

まさか・・・思考が読まれた！って言うか雰囲気・・・目が・・・
目が！！完全に笑ってない

「そんな大きな声が聞こえないとでも？」

またやってしまったのか・・・口が軽い・・・じゃないか、この
場合。リーアは怒っていた、表情がない・・・いや、目だけはナイ
フのように尖っている・・・でも、

「そういうところがカワイイんだ」

「死んでください」

リーフブレードが飛んできた・・・・・・避けられなかった・・・
ふれるだけで斬れてしまいそんな葉が目の前に広がる、否・・・目
にはもう写っていないくて痛みが、肉が避ける痛みがはした・・・
僕は死んだかな？

静かだ・・・目が覚めるとそこはさつきと同じ、違うところと言え、リアがいなくて庭の花が全てバラバラになっていて、僕が寝ていた場所半径約一メートルぐらいが血だまりになっていたってことかな？

「セーにいちちゃんやつと起きた」

別にこんな事は珍しい事じゃなかった、僕が血だらけで倒れていることなんかもうみんな慣れてしまっている。しかし今日はかなり傷が深かったな・・・すごい目眩がする・・・貧血だ。チイは何も気遣ってはくれなかった・・・傷がある前右足の付け根が痛いと目で伝えてみたが・・・

「・・・？」

もういいや・・・

パーティはどうなったのかな？やけに静かだけど・・・まだ始まっていないのか、もしかして僕を待ってる？いやぁありがたいな、世から拒絶されつつある僕だけどさすがに家族は違う、いいねえ家族。

「チイ、そろそろ僕は大丈夫だ、パーティの用意はできてる?」

「……………」

冷めた視線が……飛んできた……

「もう終わってるよ……………」

マジっすか……あら……密かに僕を待っていてくれるであ
ろう事を願っていたのがばかしい……ごめんリーア、謝って
おくよ。

残念だったけど、まあいいや。もう寝てから明日仕事場に戻ろう

……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6622m/>

影しかない

2011年10月7日05時20分発行